幼児の教育　第97巻　第8号　平成10年8月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289－0836

幼児の教育

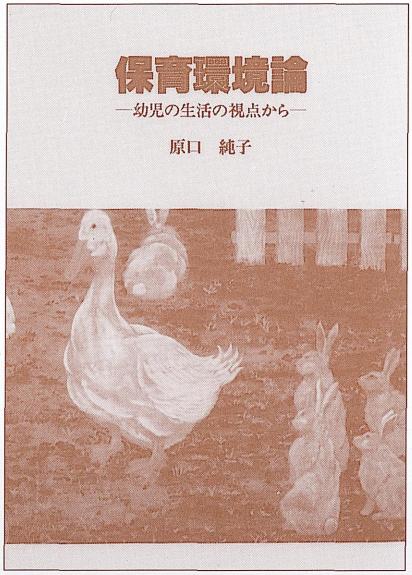
家庭-保育所-幼稚園

1998 8

第97巻 第8号 日本幼稚園協会

保育環境論
—幼児の生活の視点から—

幼児を取り巻く保育環境の具体的な事柄について、
“幼児にとってそれは何であるか”の視点からとらえようとしたもの。
粘土や折り紙などの教材から—クラスの人数、園舎の構造などまで
幼児の目、心、身になって見直し、
環境が幼児の経験内容の質を左右することを明らかにします。



新刊

原口純子　著

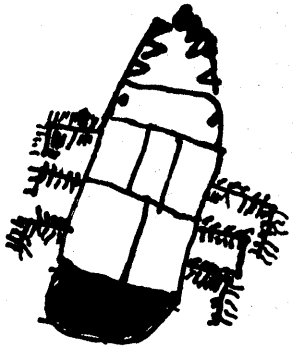
A５判　176頁　定価：本体1,600円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第97巻　第8号



幼児の教育

目次

——第九十七巻　第八号——

子どもの生活と音楽(3)　プール遊びに見られる音楽的な熱中 …藤田芙美子…（4）

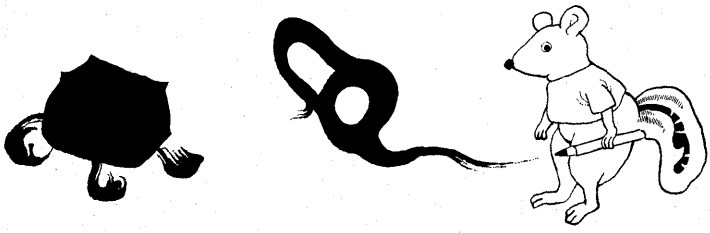
共に育つ保育者と子ども——A先生とK子の一年間— ……清原　規子…（13）

倉橋惣三「保育法」余聞(5)
　幼児の表現論(二)——その考察と背景— ……土屋　とく…（18）

ある日の育児日記から(92) ……佐藤　和代…（27）

近寄る——限られた空間が広い世界に開かれるとき— ……津守　真…（28）

© 1998
日本幼稚園協会



特集〈緑蔭図書紹介〉
翼ある言葉をかけて……川端　康雄…（34）
人間教育のエッセンス『シーラという子』……伊藤美奈子…（39）
こころのための処方箋……吉増　克實…（43）
「わかる」ということ―二冊の書物から……友定　啓子…（48）
保育園をのぞいてみたくなる本……『バオバブ広場にようこそ！』
吉川はる奈…（52）
子育ての心理(3)　遊びこそ、子どもにとってのお仕事……楡木　満生…（56）

表紙絵／佐藤　寛子
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「太陽の残像」
編集委員／田代　和美・上坂元絵里・吉岡　晶子
編集部／仲　明子

子どもの生活と音楽(3)

プール遊びに見られる音楽的な熱中

藤田芙美子

六月号に引き続いて、こひつじ保育園〇歳児クラスの子どもたちの音楽的行動の質について考えてみたいと思います。先回は、保育園に入園して間もない、四月、五月の子どもたちの室内での音楽的な活動をとりあげましたが、今回は、七月と八月のプール遊びの活動をとりあげて、さらに成長した子どもたちの音楽行動に目を向けることにしましょう。

水面を叩いて、音と水飛沫を作り出す

一九九七年七月九日

このところ連日三十度に近い暑さが続いています。今日は、朝から園庭にビニールプールを出して、水遊びをすることになりました。四人の保育者たちは、プールにお湯をいれて、水の温度を加減したり、バケ

ツで水を汲み出して、水の高さを調節したり、子どもたち一人一人の発達に応じた、魅力的でかつ無理のない水遊びの経験ができるよう、準備に気を配っています。

しゅんたくん（十三カ月）は、今日がはじめてのプール遊びなので、プールに入る前に、バケツに汲んだ水で遊ぶことになりました。プールの傍らに座ったしゅんたくんは、初めは、バケツの水を手のひらでそっと叩いたり、両手を深くバケツの中に入れたり、プールの中で、じょうろの水を浴びている子どもたちを眺めたりしていましたが、次第にプールに身を乗り出して、水面を叩いたり、バケツの水を、右手、左手で交互に勢いよく叩くことに熱中しはじめました。保育者が「しゅんたくん、ジャー」と言いながら、じょうろで水をかけると、気持ちよさそうな表情で水の方に手を差し出しました。

頃合をみて、保育者がしゅんたくんを抱きかかえてプールに入れますと、先にプールの中にいた、しおりちゃんや、たいしくんと、しばらくは、コップやじょうろをとりあったりしていましたが、コップを一つ獲得すると、これを片手にしっかり持って、もう一方の手で水面を叩くことに再び熱中しはじめました。右手で叩くときは手首を使って五、六回をひとまとめに打ち、左手で叩くときは、大きく腕を上げて二回をひとまとめで、繰り返し打ちました。水面を叩くと大きく水飛沫があがり「パチャパチャ」と音がするのに大いに興味を示しているようで、水飛沫が顔にかかっても平気で何度もこれを繰り返しました。途中、プールの中を歩いてきた、しおりちゃんに倒されて、あやうく保育者にプールの外に助け出されるというハプニングがありましたが、すぐにプールに戻り、今度はもっぱら、右手で水面を打つことに集中しました。大体六回をひとまとめとして、これを何回も繰り返しましたが、長いときは、続けて十六回も打ちました。それを見ていた保育者が、片手でプールの水を掬って、しゅんたくんの頭や身体にかけながら、しゅんたくんの右

手打ちのテンポに合わせて「チャブ、チャブ、チャブ、チャブ、チャブ、チャブ、チャブ、チャブ（七回）」「パチャ、……（六回）」「パチャ、……（六回）」「ジャブ、……（七回）」「ジャブ、……（三回）」「プチャ、……（五回）」と声をかけました。しゅんたくんは、このあと、左手でも、ひとまとまり八回から十回の速いテンポで水面打ちをしました。

☆しゅんたくんは、自分の右手、左手を使って水を叩くと、実に魅力的な音が出ること、きれいな水飛沫が上がること、その音や水飛沫を自分の意思で作り出すことができること、呼吸を調節することによって、これを一定時間続けて行うことができることを次々と発見し、この活動に没頭しました。保育者は、そのようなしゅんたくんの気持ちを感じて、思わずしゅんたくんの動作にあわせたリズミカルな擬音語で応じました。ひと呼吸に五回から六回で繰り返される右手打ち、左手打ちは、この年齢の子どもにとって安定した心地よいリズムなのでしょう。

月齢が最も高い、しおりちゃん（十四カ月）は、もうしっかりした足どりで歩くことができるので、プールの中でも、あちこち歩きまわって探索の対象と範囲を広げます。プールのそばに水を張った、たらいがあるのを見つけて、プールから乗り移ろうとしたり、保育者がしゅんたくんに「ジャブ、…」と声をかけているのを聞きつけると、そのリズムにあわせて両手で水面を叩き大きな水飛沫をあげたり、いっときも、じっとしていません。プールの中で、しっかりと両足を踏ん張って立ち、バケツに水を汲んでは高く掲げて水を流すことを繰り返し行い（続けて九回）、ダイナミックに流れる水を飽きることなく見つめているかと思えば、今度は、プールの中に座り込んで、両手にバケツを持ち、水を汲んでは自分にかけることを繰り返す（五回）といった具合です。この他にも、自分とぶつかってプールの外でべそをかいていた、しゅんたくん

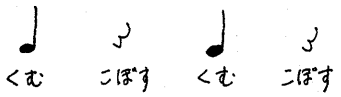
をあやすかのように、プールの中から「バァー」といって立ち上がったり、保育者からじょうろを受け取って、水を汲んではこぼす動作を繰り返したりの音楽的な行動が目立ちました。

たいしくん（十三カ月）は、じょうろを左手にもって、水面に何度も打ちつけていましたが、保育者が「たいしくーん、ジャーは」と言って、じょうろで水をかけると、両手を伸ばして水をさわりました。しおりちゃんも寄ってきて、両手を伸ばして水を受け、さらに両手を両側に振って水を飛ばしました。この二人は、じょうろのシャワーが大好きで、このあと何度も水を浴びました。たいしくんは、保育者がプールの中に入れたコップを目敏く見つけて、コップに水を汲んではこぼすという動作を、一定のテンポで何度も繰り返しました。

☆この日、たいしくん、しおりちゃん、しゅんたくん、そして他の子どもたちは皆、まず水面を手のひらで叩くことを繰り返しました。右手で叩き、左手で叩き、そして両手で叩きます。時には片手で水面を左右に引っ掻きます。水面を叩くとピチャピチャと音がするだけでなく、水飛沫が上がります。じょうろで頭から水をかけてもらうと、これも水飛沫がとてもきれいです。思わずその水を掴みたくなるのでしょう。たいしくんも、しおりちゃんも立ち上がって両手を差し出し、水を受けようとしました。

コップやじょうろに水を汲んではこぼす、という動作を繰り返す行動も目立ちました。汲む→こぼすという動作は、一定のリズムで繰り返されます（図1）。子どもたちは、コップを水面に打ちつけると広がる波紋、音、そして水をこぼすときの水飛沫の形と音を、

図1　水を汲んではこぼす動作のリズム



自分の身体を使ってさまざまに変化させ、バランスよくまとめることを楽しんでいました。同じ動作を繰り返して行うのは、動作を繰り返す度に出現する、少しずつ違った状況を、視覚的に聴覚的に確認し、その変化を楽しむと同時に、より心地よい造形的、音響的なまとまりを作り出そうとしているからと感じさせられました。

擬音語の発声にあわせて動作する

一九九七年八月十三日

お盆休みのせいか、欠席の子どもが多く、今日は、しおりちゃん、れいくん、なおとくんの三人だけでのプール遊びになりました。

前述の七月九日のプール遊びでは、プールの中に入ることはもちろん、プールの外での水遊びも嫌がって泣き叫んでいた、なおとくん（十四カ月）が、今日はプールの傍らで、バケツ一杯の水で機嫌よく遊んでいます。保育者が「なおピ、ジャブジャブは？ ジャブ、ジャブ、……」と声をかけると、先生の声にあわせるように両手でバケツの水を叩きました。このあとも、バケツの水をじっと見つめて「A・A・a」「Umida」とつぶやいたり、バケツの水をコップに汲んではこぼすことを繰り返したり、バケツの水をひっくり返して水を流し、出来た水たまりの水を指でつまんでバケツに入れたり、水の探索に熱中しました。

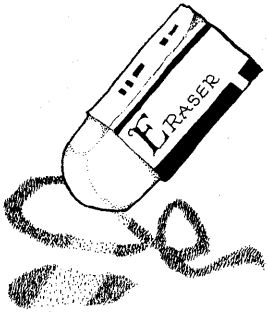
しおりちゃん（十五カ月）は、活発な発話が目立ちました。バケツでプールの水を汲もうとしてバケツを水中で前後に揺らして「da - da -」と言い、「u・Da -」と声を上げると同時に立ち上がって、勢いよく水を流します。遠くで「しょうちゃーん」（しおりちゃんの兄の名前）と呼ぶ声を聞くと、「Sho cha」とつぶやき、持っていたじょうろを落とすと、じょうろを指さして「A」と言って先生を見上げます。「hai」と言ってバケツやじょうろを保育者に手渡す場面も見られました。

しおりちゃんは、保育者が話しかける言葉の意味

を、以前より正確に理解し、反応するようになりました。保育者が「ドォー」と言って、高い位置からバケツの水を流すと、両手を差し出して水を受け、保育者が「もう一回?」と聞くと、「Un」と言って頷き、今度は自分の背中を水に向けます。その様子を見て、保育者が「修行してみる?」「修行!」と言って、しおりちゃんの頭から水をかけると、腰をかがめ、うつむいて、じっと動かずに水を浴びました。その姿は、滝にあたって修行する僧のようで、微笑ましいものでした。しおりちゃんの日常の行動と性格をしっかりとらえている保育者だからこそ、このようにユーモアのあるやりとりが生まれたのでしょう。

☆今日のなおとくんは、水の属性の研究に余念がないといった活動ぶりでした。バケツの水を叩く、揺らす、流す、つまむといった具合です。

二人の保育者が、各々に子どもの活動をしっかり見つめて対応していることも印象的でした。じょうろの水をかけるときは「ジャー」「ジョー」、バケツの水を流すときは「ドォー」と、水の流れ方にぴったりした擬音語で子どもたちに語りかけます。しおりちゃんがバケツの水を流しながら「Da-」と言えるようになると、その発話のリズムにのって「Da-」と答えて共感を示し、しおりちゃんが「Hai」といってじょうろを渡すと、「ハイ、どうも」と、しおりちゃんの持ち出した言葉を繰り返して応答します。保育者が、子どもと水遊びを心から楽しんでいるからこそ、このような共感のやりとりが出来るのでしょう。



息をあわせて応答する

一九九七年八月二十日

一週間ほど曇り日の涼しい毎日が続いていましたが、今日はまた真夏日が戻ってきました。朝から日差しが強いので、登園間もなくからプール遊びをすることになりました。子どもたちは、プールに入ることに大分慣れたようです。直径一・三メートル程のビニールプールは七人の子どもたちが次々と入って満員です。子どもたちは、しばらくは、お風呂に入っているような表情でじっとしていましたが、間もなく水面を叩いたり、じょうろに水を入れたりの活動を各々にはじめました。

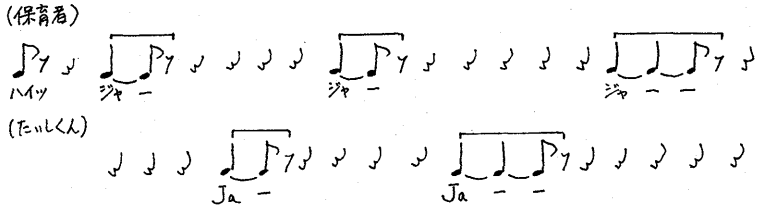
たいしくん（十四カ月）は、この日、自分から「Ja-」という擬音をしっかりとした発音で何回も発話しました。保育者がプールの中に座っていた、たいしくんに、高い位置からじょうろで水をかけながら、「ハイ、ジャー」と言うと、たいしくんは、元気に右手を上げてじょうろの水を受け「Ja-」と、はっきりした発音で答えました。観察期間中、たいしくんが「ジャー」という擬音語を発話したのは、八月六日のプール遊びが最初で、今日は二回目です。たいしくんの「Ja-」に呼応して保育者は、再び「ジャー」と言いました。たいしくんが一息で言いきった「Ja-」と同じ呼吸の長さで、すなわち、同じテンポで発声しています。たいしくんは、今度は両手を伸ばして、じょうろの水を受け、少し息を長くして「Ja--」と言います。すると保育者はたいしくんの息の長さにあわせて「ジャーー」と答えます。たいしくんと保育者の声のピッチはだんだんに合ってきます（図2）。たいしくんは、そこで立ち上がって、保育者の方に近づこうとしますが、そのたいしくんに保育者は「自分でやってごらん、ジャーって」と言って、じょうろを渡します。たいしくんは、いったん座って、じょうろに水を汲み、また立ち上がって、右手にじょうろを持ち、それを傾けて左手で水を受けます、そんなたいしくんに

向かって、保育者は再び「ハイ、ジャーー」と言いながら、じょうろのシャワーをかけますと、たいしくんは、持っていたじょうろを放り出して、両手を上げてシャワーの水を受け、タイミングよく「Ja - -」と答えました。そして今度は、「Ei」と言って、保育者に向かって手を伸ばして近づき、「e・e・ei」（「ちょうだい」と言っているように聞こえる）と言いながら保育者からじょうろを奪いました。たいしくんは、このあとも、プール遊びをする中で、じょうろを傾けながら「Ja -」を一回、「Jo -」を二回発声しました。「ジャー」という擬音語を確実に習得したプール遊びでした。

☆たいしくんが、保育者と応答して「ジャー」という擬音語の発声を、より確実なものにしてゆく過程は実に感動的でした。じょうろの水が流れる様子が「ジャー」だと、気持ちを高揚させて発声するたいしくんと、その気持ちをしっかりと受けとめた保育者との応答は、お互いの呼吸を合わせて作り出す拍節にのせて、各々の気持ちを「ジャー」と唱える声に託し、確認しあい、よりバランスのとれた音声表現に作り上げる喜びに満ちたものでした。互いに響きあうとは、こういう応答をいうのでしょう。

○歳児クラスの子どもたちのプール遊びは、先回とりあげた室内遊びにも増して、子どもたちの周囲には実

図2　たいしくんと保育者の応答



に魅力的な音の世界、造形の世界があることを私たちに教えてくれるものでした。自分の身体を使い、知恵をめぐらして、水に関わり、音を、形を作り出すことに熱中する〇歳児クラスの子どもたちは、それが、まだおむつもとれない、ことばも獲得しはじめたばかりの乳児たちであることを、しばし忘れさせるほど、主体的で、問題解決を成し遂げる力に溢れていました。

プール遊びには、子どもたちが水と関わって作り出す音を、さまざまな擬音語で表現する、保育者のリズミカルな語りかけがちりばめられ、日本語の文化には、こんなにも多彩な擬音語があったのかと驚かされるほどでした。そんな中で、子どもたちは、保育者と呼吸を合わせて共有する時間を作り出し、動作や音声をリズミカルにまとめる方法を確実に学んでいました。

私は、幼児期の子どもたちが、日常生活の中で、頻繁に擬音語をリズミカルに唱えること、そして、この傾向は、年齢が低いほど、顕著であることを、これまでに行った、一歳児クラス以上の年齢の子どもたちの音楽行動の観察を通して知ってはいましたが、ほかの言葉に先立って、何故擬音語なのかについては、よくわからないでいました。今回、〇歳児クラスの子どもたちの音楽行動の実際を追ってみて、子どもたちが、いち早く擬音語を獲得し、これを好んで用いるのは、この年齢の子どもたちが、音を聞いたり、自ら行動を起こして音を作り出すことに熱中するので、周囲の大人たちが、そのような子どもたちの音づくりに時間的な秩序を与える擬音語を豊かに用いて語りかけ、子どもたちの活動を励まそうとしているからにほかならないことを知りました。保育者と子どもたちの親密な相互交渉には、お互いの文化を共有し、確認しあう、文化の伝達の本来的な姿があると思いました。

（国立音楽大学）

共に育つ保育者と子ども

―A先生とK子の一年間―

清原　規子

春休みが過ぎ、新学期が始まった。

二週間程会っていないだけなのに、どの子も大きく成長しているように感じる。新しい学年になることへの期待にもよるのだろうか、とふと考える。

年長になったK子はどんな様子だろうか。新しいクラスにもうなじめているだろうか。少しばかり気になって部屋をのぞきに行くと、同じクラスの女の子たちがままごとをしているところに、どっぷり入るわけでもなく、かといって外から眺めているわけでもなく、何となく彼女たちの横にいる。私を見るとそれぞれに「今、おかあさんごっこをしているんだよ」と口にし、K子も自分から「私はお姉さんなの」と教えてくれる。

年少の春から幼稚園に入園したK子は、その年の終わり頃から自分を出せるようになり、年中になるとさら

に、自分の思いを不器用ではあるけれど様々な行動で表現するようになってきた。そんなK子の年中の一年間を、K子とK子に関わってきた保育者の様子から振り返ってみたいと思う。

人一倍愛情欲求の強いK子は四月、担任となったA先生にいつも抱きつきに行っていたが、五月の中頃からほんのささいな事柄で癇癪を起こし、部屋を飛び出したり、ものを投げたり壊したりすることが度々あった。部屋を飛び出して、行くところは大抵職員室で、そこには園長やバスの運転手そしてフリーの保育者が私を含めいつも三人程いた。K子は職員室に来ると、それぞれの先生と話をしたり、私たちのやっていることを見て手伝ってくれたり、職員室の机を借りて自分の活動をゆっくりと始めることが多かった。私たちもクラスで何があったか分からないから余計に、できる限り彼女に応え、心落ち着いた時を過ごせるよう心がけていた。そのような日々が二学期の始め頃まで続き、そして次第になくなっていった。部屋でのK子の具体的な変化を知る上でも、少しA先生の記録メモを見てみたい。

食べ物の形が気に入らないと癇癪を起こす。
（五月三十日）

「はさみを持って帰りたい」等言い張り、機嫌が悪くなる。
（六月二日）

機嫌を悪くして（自分で作った）時計を破ってしまう。
（六月十日）

ハーモニカの持ち方を指摘されると、ハーモニカを投げる。
（七月八日）

乱暴さはないが、「やだ」と何に対してもわがままである。
（九月四日）

（運動会の）練習中、ずっと職員室にいる。給食の時間にどうにか戻る。
（九月八日）

部屋にいる時間は短かったが、自然と練習に参加するようになってきた。
（九月十日）

かけっこの練習に初めて参加する。一番になってす

ごく嬉しそうだった。（九月十一日）

少しでも（友達の）輪からはずれるとすぐに機嫌が悪くなる。（九月十二日）

随分部屋にいるようになった。（九月十七日）

クラスから抜け出すこともなくなり、随分落ち着いてきた。（十月一日）

（聖話のため、年中少は二階に上がるのだが）二階に上がるのを嫌がっていた。しかし、少しして笑いながら一人でやって来た。（十月四日）

朝の会の途中、すねて部屋の外に出たが、何も言わず見ていると自然に中に入ってきた。（十月十八日）

※（　）内文章は筆者補足

記録メモにあるように、ただ癇癪を起こしていた状態から、自分自身で自分をコントロールできるようになっていった。もちろんその日の状態でできたりできなかったりだが、九月末頃からはほとんど職員室に長居をすることもなくなり、朝等に顔を出し、それぞれの先生に挨拶をする程度となっていった。

その間、A先生もかなりいろいろと思いを巡らせていて、自分自身を責めてみたり、周りの先生に相談してみたりしていた。K子への接し方も、はっきり注意してみたり、そのまま受け入れてみたり、少し離れて様子を見てみたりと試していたし、朝起きた時の調子が悪かったのだろうかと考え、お家での様子を保護者の方に聞いてみたりもしていた。二十五人程の子どもたちを抱え、その中で一人をじっくり見るということは簡単なことではないと思う。特に担任という責任感で重圧もかかってい

たのだろうが、K子をどんなふうに受け止め、理解していったらよいか思いあぐねていたことと思う。そんなA先生に対し、次のような助言もあったようである。―K子は何か不安定なところがあるのでしょう。満足するまでしばらく様子を見てはいかがでしょうか。必ずクラスにとけこめるようになります―。そして、九月頃からのA先生の記録メモには自分自身の思いも記されるようになっている。

時間をかけてゆっくり関わっていきたい。
（九月四日）

スキンシップをよくとっていきたい。（九月十日）

よかったり悪かったりの繰り返しだが、本人のやりたいようにやらせていこうと思う。（十月九日）

恐らく、初めの頃は自分自身のことを書く余裕がなかったのであろう。A先生自身も時間と共に大きく変化していったように思う。

そして十二月――

最近とても落ち着いてきた。ものを投げたり、製作物を破ることもなくなった。今まで思うようにさせてきたのですっきりしたのではないだろうか。顔立ちも優しくなり、友達に対しても思いやりが持てるようになった。乱暴な言葉も言わなくなって良かったと思う。
（十二月一日）

このあとも、たまにすねることがあってもすぐ立ち直る様になった。また癇癪という他人に向けられたものではなく、落ち込むという自分自身で受けとめる表現も出る様になり、そんな時は周りから励まされて元気になったりと確実に自分自身をつかんでいっているように思う。

今こうやって一年間の流れを見直してみると、年中の初め、自分の欲求や要求をようやく表現できるように

なったばかりのK子は、他者からの提案を受け入れる余裕などなく、それを癇癪という形で拒否していたのではないだろうか。それが精一杯の自己主張だったのだろう。あるいは、自分自身をしっかりみつめてほしいというシグナルでもあったのかもしれない。きっとK子も必死だったのだろう。

そんなK子と接していく中でA先生自身も随分と変化したことと思う。待つということ、子どもの育ちを見守るということ、子どもを信頼するということ、様々なことを考え、学んでいったのではないかと思う。そしてK子・A先生と関わってきた他の全職員にも、幼稚園の子どもたちを皆で育てていこうという思いがあったからこそ、その一人一人の力が力動的に働き、A先生も肩に力が入ることなく、ゆったりとK子を見ることができるようになっていったのだと思う。

担任を持っている先生の他に、前述したようにフリーの保育者が何人かいる。子どもたちは自分自身の何らかの精神的課題を抱え、それを解決していくのに自分から場所を選んでいく。時に、その場所は私たちフリーの保育者であったりするが、子どもたちは私たちが必要な時やってきて、必要でなくなった時、クラスに戻っていく。一瞬寂しい気持ちもするが、自ら戻っていく時のしっかりした足取り、あるいは、弾んで楽しそうに行く様子にまた一つ成長したのね、と嬉しさが心に広がる瞬間でもある。

K子とA先生がこの一年間お互いに育ちあっている姿を見て嬉しく思う。私もその中で大なり小なり成長できていればよいのだが……。

（清星幼稚園）

倉橋惣三「保育法」余聞 (5)

幼児の表現論(二)
――その考察と背景――

土屋　とく

前回では幼児の表現に対する倉橋先生の見解と、保育項目との関連で出されてきた誘導の方法等について記述した。今回は続いてその内容の考察と、何故こうした主張がなされたのか、その背景にあったと考えられる事項のいくつかについて触れてみよう。

一、〝自分の芸が身にしみる〟をめぐって

講義録の中で、幼児の自己への表現と満足を語る言葉として出されてきたこの箇所は、長年その解釈の難しさを筆者に迫るものであった。

先生にとっては何気無いような言葉であり、なお最

も正鵠を射た言い表し方であっても、現代においては誰もがその内容を確実に読み取れるとは限らない。

〈芸〉とは、身に学び得た文武の技。芸能。芸術。技芸。（広辞苑）であり、一般的な理解からいえば修練を経て身についた能力をさす。しかしここで言う芸とは修練以前の幼児の表現に関する見解である。

また〈しみる〉とは、古語の〈染む〉の口語体で感情に深い印象を受けることであり、心に深く味わわれる・しみじみ感じられるという意味をもっている。

しかし、幼児が表現しようとする時の心理の内に、他から見えない内部感覚としての自分自身の満足があると説く主張は、明確に証明することはできないながら、これが本当ではないかと認められる説得力を持っている。

更に〝自分の芸が身にしみる〟という感覚は、芸術的表現という行為全般に存在する微妙な内的衝動そのものなのではないか！ということに思い至る。

何らかの表現を試みようとする者がとる行動は、まさに自身の中に生じてくる止みがたい衝動につきうごかされて、そのエネルギーを外に向けて放出する行為であって、外部からの強制的なヤラセだけで成立するものではない。

彼等は表現したいから行為するのである。最初からその効果だけを計算して取り組んでいくとは思えない。一つの作品を作り上げる動機や過程の中で、しぜんに醸し出されてくるものだけが真の芸術に近づきうるものであり、内から止みがたく立ちのぼってくる力そのものが人をしてある表現に向かわせる。

そして自身の内部感覚で自分自身に納得される表現ができた時、表現者は心身一体の無上の喜びに浸される。こうした境地はまさに〝自分の芸が身にしみる〟ことなのではないかと思う。また優れた芸術表現が場と機会を得て、人々の感動を呼び起こすのは、スル者のエネルギーがウケル者に伝わり、両者の間に生じる

共鳴が悦楽となって、生きる力の再生に繋がるのではなかろうか。

そこに至る迄には表現の質そのものを高めるための修練が必要であり、時には苦しい努力が重ねられよう。しかし表現したいものの本質を掴む感性と技能が、あるレベルに達した時に現出される姿や作品は自身で肯定される心からの充実感に繋がる。

こう考えてくると、表現を成り立たせる本質は元来この原始的な内部感覚であり、芸術というものは、幼児の表出から表現に分化する発達過程の中で芽生えをみせ、人間の一生のなかで次第に花開き、実を結んでいく。しかしその底に流れるものは一貫したものであり、そうした芸術的表現というものの根源的な意味を、この短い言葉に託して、先生がさりげなく語ったのではないか。

また子どもの現したい思いは、大人が考える以上に多くのものを含んでおりながら現す手段に乏しく現しきれないものを、どう読み取っていくかの重要性を暗に示唆しているのではないかと解釈することができる（老成した一流の芸術家が無心の境地で表現に向かう時、身にしみる喜びが最も純粋な形で体現され、それは幼児の感覚と不思議な一致をもつものではないかと、感じられることがしばしばある）。

二、表現と自発性について

前回に幼児の表現を自発性との関係で述べたが、この件に関しては大正四年の『婦人と子ども』一月・二月号に保育入門として〔九、幼稚園教育の方法　第三、其の手段〕として次のような記述がある。

動作遊戯――幼児の精神生活を最も自発的に、最も具体的に、音声によって発表するものが唱歌ならば、これを身体の運動によってするものが動作遊戯である。元来、観念なり情緒なりを身体的に表出する處の踊り、所作、身振りの類は、今日に於いては

極めて発達したる芸術的技巧に属するものとなって仕舞って居るけれども、その原始的な性質に於いて頗る自然的自発的なものである。……前項―音楽唱歌―の條に於いて述べたると同じ注意は、この場合に於いても必要である。すなわち、技巧よりも其の自発を尊重し、外部的の巧緻よりも、内部的情緒の力を重んじることである。之なければ音楽が其の生命を失う如く、動作遊戯も亦其の唯一の生命を失ふのである。……

手技、圖畫――幼児の抑えきれない自発性が、そのままにあらはれて、聲調音律となり動作身振となると同じく、ものに託して之をあらわすものが手技であり圖畫である。

勿論、何を型どり、何を描くかは、その時々の影響に支配される。

この論述を見れば自ずからわかるように、幼児の表現活動についての考えは若い時代から主張され、一貫していることが理解出来る。

保育の根本考察を追求した先生は、実際保育の指導に関しては寧ろ積極的な発言を出来るだけ控えていたように思われ、菊地ふじの先生も「保育内容についてもっともっと聞いておきたかった」と講義の時間切れを記録の中で惜しんでいるが確かに文献が少ない。

しかし、その原理を自発性と具体的に置き、〈保育はいかなる様式を取っても良い。人々の特色、またその場合場合の生きた活用をすべきであるが、いかに立派にされたとしても、その方法が自発的になされなければ、またその結果が実に立派であっても、その方法が自発的にあらざれば、それは根本原理に背いた大失敗である。〉と確固たる信念を貫きながら尚且つ現実的で柔軟な姿勢でのぞんでいるのである。

三、菅原教造との交遊

倉橋先生の幼児表現に対する考え方には、東大時代

から最も親交があつかった畏友であり、後に義兄となった菅原先生の影響が色濃く関係しているように思われる。

（同じ心理学科卒業。東京女高師で永く教鞭をとり、新制大学になったお茶の水大学でも美学を講じた―この講義は筆者も受けている―。奥様が姉妹であり倉橋先生のご葬儀では委員長の労をとられた）

昭和十年に行われた日本幼稚園協会夏期講習会の際に菅原先生が『子どもの繪』と題して講演した内容は、ご自身のお子さまの絵を例に引きながら芸術一般に対する考察を述べたものであるが、その深く高い見識は今日に於いても古いものではなく、傾聴すべきものが随所に示されている。

一部を引用すれば

○〔繪の大道は一筋道――芸は同質〕　之は実は繪と言っても人間と言ってもいいんです。人間の代わりに社会と言ってもいいんです。凡て繪というものは、幼稚園で子供の描く繪でも、小学校でも、中等学校でも、専門の美術学校でも、要するに繪の大道は一筋道でありこれをもっと大きく言い現せば、凡て芸というものは同質のものだという事を根本に考えなければなりません。それですから小さい子供の描く繪も専門家の大家がそれを見て「ああ面白い」と感心するたちの見方が大切なんです。

教育者の根本の欠点は幼稚園時代だから斯うという風にしか見ないことなんです。同時に小学校だから、中等学校だからと繪の大道を言わないで（これは実は繪の本筋の道が解らないからなんです）段階的にものを見る悪い癖がついている事なんです。

……

子供の知的生活が簡単から複雑へ、砕いて言えば馬鹿から利巧へ発達するものときめてかかっている事なんです。……文化、芸術、殊に繪の世界になりますと、発達とは美的統一のあるという事、芸術的

の価値のあるという事であり、未発達とはその統一のない、芸術的価値の少ないと言う事なんです。ですから繪としての初心の・無邪気な・素直な描現は、その細工をしない・手のこまない所に、却って単一から来る特殊の価値を示すことが少なくないのです。……

『子どもの繪』は一気に統一に向かって迫ってくる力強い表現を与えます。単純をもつて統一された全体の味があるんです。要するに芸は同質のものであり繪の大道は一筋道なのですから、子供の遊戯にしても、表情にしても、繪にしても、人間の大道に即した眼で見て、初めて眞の味というものが掴めるのだと思います。

○　筆をとって紙の上に描くを、畫面の繪と言うのに対して、まだ「畫面の繪」にならずに気持ちで躍動して居る繪を「心境の繪」と申します。これを繪を描く事が出来ない素人は、かなり持っており、繪を描ける人は尚更鮮やかにそれを持っているんです。

子供であると、その心境の繪というものの躍動が実に豊富なんです。例えば十二巻のフィルムを一點

に凝縮したようにして心境の繪を握りしめて、それを発展させるんです。その一部が畫面の繪になって現れてくるので、其處から一面に心境の繪が豊富に多方面に動いて躍動し、躍動しているという事は、心境の繪で自由自在に畫面の繪を変化して、それを眺めて居るという事なんです。……

○「向きの繪」は「気持の素」が體の動き手の動きになって、そのまま畫面になったものです。……等々

其の一から其の五まで子どもの絵について詳細に説明を行っている全容を紹介出来ないのが惜しまれるが、「保育法眞諦」を世に問うた時期と重なって、全国の保育者にこうしたレベルの高い講演がなされた事。また倉橋先生が種々の経緯から幼児の表現に関しては菅原先生に説明を託されたのではないかと考えることもできる。なお戦争をはさんだとはいえ、これだけのものが後の保育内容に生かされず、空白の時期があまりにも長かったと今更ながら残念に思われる。

四、芸術を愛する資質と環境

類い稀な感性に恵まれ、該博な知識と芸術一般にたいして深い造詣を持たれていた倉橋先生は、絵画の鑑賞・児童文化について数々の発言をされ、日本の幼児教育に及ぼされた影響力は今更ここに述べるまでもないが、その背景とエピソードに少し触れてみたいと思う。

優れた資質に加えて、幼児期からの環境が大きな影響をもたらしたことは、自伝である『子供讃歌』に自己分析的に詳しく記されているが、いうなれば良い意味での江戸文化と近代文化両者の、また日本古来のものと、洋行などを通して学ばれた体験が和洋全般にわたる一層幅広く深みのある芸術的感性につながったと言えるだろう。

「父は母と共にまことにいい親であった」と語る中

で、厳しさを持ちながらも、まめな人、多趣味人であり、いつも親と共に楽しく教育を教育として行わなかった親の態度と共楽と信任とを感謝する。母上をしみじみ想うのは静かに座って縫い物をしているなで肩の姿であり、夫の趣味に合せて三味線をフトもホソも立派にやってのけたとも書いている（註　フトとは浄瑠璃＝義太夫の三味線を指し、ホソとは長唄・清元・常磐津などの三味線のこと。両者の棹（さお）の太さの違いから自ずと音の高低や響き弾き方が異なる）。

また歌舞伎好きは有名であり、特に名優と言われた六代目菊五郎の大ファンで授業の中でその所作を示し蘊蓄を傾けることもしばしばあった、と卒業生は語っている。そして絵画・音楽・劇を問わず一流の芸術を鑑賞することを熱心に勧め、各自が芸術に対する目を養い感性を磨くことが、子どもの理解や良質な保育に繋がると説いたという。教えを受けた方々はこの勧めを生涯を通じて実行しておられるのもすばらしいことである。

倉橋・新庄共著の『日本幼稚園史』に、大正十五年四月二十一日フレーベルの誕生日を期して、日本で初めて幼稚園が独立の法令として公布され、関係者の喜びの様子が三日にわたって行われた記念大会の記録として載っている。昼の全国大会の後二日目夜の帝国教育会館でのパーティー。三日目午後、戦前は特別の許可を要した新宿御苑の拝観。次いで「此夜、有志の人々の歌舞伎座観劇があった。名優の妙技に恍惚として、かれ人ともに、連日の疲れを忘れたことであった。」＝倉橋稿＝とあるが当時としては歌舞伎が最高の芸術的娯楽だったことが伺われる。

むすび

倉橋先生の幼児表現に関する特質は、いうなればその保育論全体に一貫して流れている。

1　子どもの育ちゆく姿を実に鋭く詳細に見つめて

導き出された論であること。

2　子どもというものを統合体として、分析と同時に総合的視点に立ちかえって、自身の主張とされていたこと。

3　優れた感性の持ち主であり、芸術一般に対する造詣の深さを示しながら、その底に常に豊かで温かい心情を秘めていたこと。

4　生涯を通じて教育の根本考察を追求し、その敷衍に努めたこと。

等を改めて感じさせるものである。しかし幼児の表現に関して優れた主張を随所で述べながら、それが重複し語られているのは、明治の幼稚園開設の時点から定められた保育内容としての〔項目〕に縛られざるを得なかったからではないかと推察できる。

現在の教育要領では、長らく分断されていた幼児の創造的表現というものが、纏めて論じられるようになったことを、倉橋・菅原両先生が幼児のために共に天上で喜んでおられるのではなかろうか。

（洗足学園短期大学）

参考文献

『倉橋惣三「保育法」講義録』菊地監修　土屋編　フレーベル館
『倉橋惣三選集』　第一巻――第五巻　フレーベル館
婦人と子ども　第十五巻第一・二号　フレーベル会
幼児の教育　第三十五巻第十一号　フレーベル館
日本保育学会大会　第三十七・三十八・三十九・四十四回
研究論文集　林　健造　造形表現に関する諸論文
『倉橋惣三その人と思想』　坂元彦太郎著　フレーベル館
『日本幼稚園史』　倉橋・新庄共著　フレーベル館
『生活に根ざした保育を』　菊地ふじの著　大泉双葉幼稚園
『子どもに生きた人・倉橋惣三』森上史朗著　フレーベル館
『風姿花伝』　世阿弥　野上・西尾校訂　岩波書店
他

ある日の育児日記から

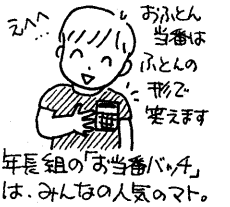
(92)　佐藤　和代

今月は圭の誕生日があり（九歳になりました）友達を招いてパーティーを開きました。敬が、「よーし、今年はお父さんが料理してやるぞ！」とはりきって、あさりのスパゲティ、ハンバーグとにんじんグラッセ、ポテトサラダ、それにケーキと紅茶、というメニューを用意しました。

敬にしてはめいっぱい子ども向け…の料理だったのに、ふたをあけたら圭の友達の「これきらーい」「食べられなーい」の大コールにみまわれてしまいました。敬は「どうしてこんな好き嫌いの多いやつばっかりなんだ！」と唖然。

多少の好き嫌いがあってもいいとは思うけど、みんな実に堂々と「これはきらい」と主張するのにびっくり。私の感覚からすると、きらいって言うのは恥ずかしいことなんだけど…。好き嫌いの主張も自分の表現、当然していいこと、というのが風潮なのかしら。

疑問をいだきつつ、よその子に「食べ物を残すときはごめんなさい、という気持で」なんて説教するほどの信念もなく、残り物を片付けた私。あとで圭に聞きました。「圭は何がきらい？」「えーと、ブルーチーズと、うにのグラタン」。ま、いいか、よそでは出されそうにないわね。子どもに何食わせてんだ、と非難されそうだけど。



年長組の「お当番バッチ」は、みんなの人気のマト。

近寄る

―限られた空間が広い世界に開かれるとき―

津守　真

1

近寄ること―大人の福祉施設で

四十歳の男性のMさんが私の傍らに近寄ってきた。私はこれまでズボンのポケットに手をいれて調理場の前で立っている彼の姿しか見たことがなかった。私が彼の肩にちょっとでも手を触れると、肩を引っ込めて拒否した。彼の方から私のそばに寄ってくるなど考えられないことだった。そのときは、Mさんはいつのまにかそっと近寄っていたので、私はそのことに気が付かなかった。ひとりの職員が、「先生に親しみを感じているんですよ」と言って、「Mさん、なにか欲しかったら頼んでみたら」と話

しかけた。私が「何か用ですか」と尋ねると、彼は私を振り返りながら自動販売機の方に走った。

その翌日も、Mさんはまるで猫のようにいつのまにか私に近寄っていた。自動販売機のコーヒーが欲しいのは明らかだった。自分が住んでいる場所なのに、こんな小さな願望を人に伝えるのをためらっていたのである。敷地の端に数年前に少しおしゃれな造形教室を建てた。そこはいつでもだれでも行って好きなように紙や粘土をいじれるようにしてある。そこの担当の職員のYさんはだれでもをよく受け入れてくれるので、手があくとそこに走ってゆく人が何人もいる。四十歳、五十歳の男性が何人もそこにいってお茶を飲み、引き出しをあけて紙や絵の具を出しているのもほほえましい。Mさんは最近ゆきはじめたメンバーである。私の傍らに近寄ってくる背景には彼の中に生じたそのような生活の変化がある。

「近寄る」という小さな行動であるが、そこに示されたその人の関心に答えたことによって、彼は単にひとりの人に何かをしてもらい欲求が満たされたというだけでなく、自分の能動性が確かに答えられる世界があることを知った。そしてその人を通して人間への信頼を学んでいる。

子どもが私のそばに近寄ってくるときの大切さを、私は保育のさまざまな場面でこれまで何度も語ってきた。子どもが私に関心があるから近寄ってくるのだから、その関心に目をとめることからかかわりは始まる。子どもが手に握った物を見せるとき、

膝にすわるとき、おんぶやだっこを求めるとき、話しかけるときなど、子どもが私を選んで近寄ってくる時は貴重な時である。それを受ける私がどういう心をもって受けるか、それによってかかわりの質がかわってくる。このことは教育でも福祉でもかわらない。

近寄られること

大人に近寄られるとき、ときによって人は押し付けがましさを感じ、自由感を損なわれることがある。

ひとりで感覚をたのしんでいる赤ん坊が、授乳の時間に気を奪われている母親にバタバタと近寄られるとき赤ん坊は驚き、静かな自由が破られる。

幼稚園や保育園で、何かをしなければという大人の側のあせりや過剰な教育意識が先だって子どものそばにいくと、子どもは私から離れてゆくことが多い。そのように近寄られた大人に圧力を感じるのだろう。機会があれば大人の意図する方向に誘おうと思っているとき、近寄られた子どもはその大人に好感をもたないだろう。こんなことをしたら困ると思って見ているときには子どもは監視されていると感じ、近寄るのとは逆に、大人を避ける。子どもが自分で動けるようにと願ってそばにいる大人を子どもはすぐにうけいれる。子どもは近寄る大人の心に敏感である。

近寄るときには、優しさを心に用意することを忘れないでいたい。

2

一九七〇年代の後半、私はオランダの現象学者、エディット・フェルメール先生からさまざまなことを教わった。保育の現場で私と子どもたちの遊びを一緒に見るのが私も楽しみだった。謙虚で控えめな先生は、私が行動を表現として見る見方に賛同して、西欧の文化の中で思索されてきた書物を何冊も紹介してくださった。あるとき、ミンコフスキーを引用して「宇宙論」に言及され、この美しいフランス語を英語に翻訳するのは困難なことだと言いながら先生は私にタイプライターで打った数枚の英訳文を送ってくださった。

「身体の運動に習熟することは、空間感覚の獲得と密接に関連している。子どもは三歳くらいになると跳ぶように弾みをつけて歩く。もはやよちよち歩きの幼児が床の上を一足ずつ歩くのではない。股をひろげてバランスをとる必要がないから態度も変化する。子どもはより大きな空間の自由を得て、ゆとりある寛容な態度を身につけたことの表現である。空間を横切ることによって、子どもの身体は単に動き回るための道具ではなくなる。身体の運動が精神的存在を実現する。」

「ボルノウは二種類の空間を区別する。部屋の空間は感覚的経験の世界である。すなわち眺望がそこで終わる地平線によって囲まれた世界である。囲まれた部屋は安全な空間であり、自分の世界を発見しに出かけてゆくための地盤となる中心—家—であ

る。幼児は囲まれた部屋の中に住んでおり、生活世界の周囲の天文学的な無限の認識はない。ボルノウの意見に従えば定冠詞をもった“der Raum”（部屋）は定冠詞をもたない“Raum”（空間）とは区別せねばならない。なんとなれば部屋は物と物との間の空間であり囲まれた安全な空間であるのに対して、スペース（宇宙）は意味を発見し発展させる自由な空間である。」

「子どもは運動によって物のまわりを歩き回り、自分の観点から部屋の空間関係を発見する。食器棚の『うしろ』は自分の身体との関係で理解される。階段を昇ったり降りたりすることが物の位置を変化させる。物は身体の『上に』来たり『下に』来たりする。それは私共の精神の出来事である。子どもは身体を動かして空間を横切り、物との関係を積極的に広げることによって部屋のなかの位置関係を展開させる。つまり、身体で空間を動き回ることによって精神の自由が得られる。（ミンコフスキーはそこから更にイマジネーションとファンタジーについて述べる。）」

「身体運動の自然の発達のみでなく、言語を学ぶという教育学的援助によってこの関係は一層明瞭になる。椅子は窓の近くにある。本はテーブルの上にある。庭に入って行く、家から出ていくのは運動による空間の横断のみでなく精神の面での意味を指示している。言葉によって人は主観に固定されずにより広い間主観的な意味を獲得する。」

身体の小さな動きを通して子どもの精神の世界を見ること、保育者はそれに応答す

るのであることを、私はフェルメール先生と語り合った。一九七九年に私はユトレヒト大学を訪れた。空港に出迎えて下さったフェルメール先生は小さなフラットの自宅で私のために朝食を用意しておられた。食卓のチーズ入れからブルーチーズの一切れを先生はだいじそうに取り出して私にすすめられた。以来私はブルーチーズを食べるたびにフェルメール先生の文化の香りを思い出す。Mさんにとってもコーヒーは文化への窓口なのかもしれない。

3

入園したばかりの三歳の幼児が、学校の中を何週間も歩き回るうちに、眉間の皺がなくなり、大きな声で笑い、自由感を得てゆく。幼い子どもが机の上の物に手をふれたとき叱られると全宇宙が閉ざされたかのように感じる。限られた空間の中で能動性を実現することが、子どもの精神を宇宙にまでひろげる。人に対する信頼と、自分の能動性に対する自信とは人間の成長の基盤である。それを体験した人間は、試行錯誤によって現実の限界をも自ら受け入れてゆく。試行錯誤のことを英語で“trial and error”という“trial and right”とは言わない。自分で能動的にすることが大切で、そうすれば間違ったときには人間は自分で訂正する。正しいことだけを教えられたのでは人間の成長はない。

特集〈緑蔭図書紹介〉

翼ある言葉をかけて

―ホメロスの『オデュッセイア』（松平千秋訳）

川端　康雄

ホメロスの叙事詩、とりわけオデュッセイアはわたしの偏愛する物語の一つで、おりにふれて味わい親しんでいます。これを松平千秋の翻訳（現在は岩波文庫に入っています）で最初に読んだときの不思議な読後感はいまでも忘れられません。不思議、というのは、当時は近代小説ばかり読んでいたためなのかもしれませんが、そうした小説では経験できないような精神状態をオデュッセウスの漂流冒険譚はもたらしてくれたからです。具体的にお話しする前にまず他人のホメロス経験を引き合いに出しておきたいと思います。

先年他界した文芸評論家の寺田透さんは、少なくとも二回、原書でホメロスの叙事詩の全編を読み通していたようです。「ホメーロスに親しむ」

（『語らぬ筈の自分の事ほか』筑摩書房、一九八三年）というエッセイに書いていることですが、定年の六年前に東大教授を辞して「自由業」になってから、毎朝テクストを二三ページずつゆっくりと翻読するのを日課にしているうちに、ホメロスを読まないとしごとをするための気分も頭も調わないという感じになったというのです。「では一体どんな気分や頭の状態なら、しごとに向いたと自分を感ずることができるのか。……一言で言へば、頭が自在にはたらくやうになつてゐるという自覚が持てること……さういう風にしてもらへる点で、今のところ、僕にはホメーロスにまさるものがない。」「読むものの精神を解放し、自由を味ははせるやうにはたらく」、そういう機能をホメーロスの叙事詩はもっているという指摘です。

わたし自身は、時間も語学力も満足になくて、寺田さんのようにホメロス全巻を原書で読み通すことはまだ果たしていません（老後の楽しみにできたらいいとは思っています）が、以前イリアスの原典講読に参加して部分的に読んだことがあり、そのときのことを思い出すと、講読が終わっての帰り道はいつも、軽やかで麗らかな気持ちになっていたものでした。物語の中身のみならず、力強く単純な構文の性格そのものに、そうした解放感をもたらす力がたしかにあるのだと実感しました。

松平訳はそうしたギリシア語原典のもつ力を極力日本語に移しえた名訳であると思います。「エピテトン」の訳し方を見てもそれが言えます。「エピテトン」というのは、物語中でくりかえし使われる形容語句（一種の枕詞）のことで、「アイギス持つゼウス」「眼光輝く女神アテネ」「駿足のアキレウス」「白い腕（かいな）の女神ヘラ」「洞（ほら）なす船」「翼ある言葉」「葡萄酒色の海」などのように、キャラクターや事物につけられ、独特な気分とリズムを作りだしています。ホメロスの近代語訳は

「逐語訳」か「自由訳」かの二つの類型に分かれるそうです。松平訳はむしろ前者で、比喩表現はそのまま生かして訳すやり方を採っています。たとえば夜明けの表現としてくりかえし出てくる表現は「朝のまだきに生れ指ばら色の曙の女神が姿を現わすと」と訳されています。自由訳にするなら「朝になると」ですみます。じっさい夜が明けたという情報が第一なのであるし、それで翻訳を簡略にできますが、それでも、薔薇色の指をした曙の女神が東の空に現れるというイメージをとばしてしまうと、ホメロスの詩の大事な部分が抜け落ちてしまうことは否めません。おなじことが、「なんたる言葉がそなたの歯垣を洩れたことか」という表現についても言えます。これにしても、要するに「馬鹿なことを言うな」の意味なのですが、「歯垣」というメタファーがこの表現の生命になっていることは言うまでもありません。他にも、「さながらそれは～のようであった」の類の直喩表現を何行にもわたって（たいてい、喩えられる当の対象よりも数倍も長く）連ねることがよくあり、そうした構えの大きな比喩語法も読者をのびやかな気分にさせる役割にあずかっています。それも松平訳ではうまく生かされています。

物語の中身について見ましょう。トロイ戦争が十年目にギリシア軍の勝利をもって終結し、故国イタケへの帰途についたオデュッセウスは、嵐に襲われ、さらに十年間にわたって奇怪な漂流冒険の旅をする。その間故国では愛妻ペネロペイアが求婚者たちの圧迫に耐えながら留守を守っている。ついに帰国したオデュッセウスは乱暴狼藉を重ねていた求婚者たちを退治して妻子との再開を果たす――大筋を書けばこうなりますが、そのように簡単に要約するには、オデュッセウスの漂流冒険譚はあまりにも忘れがたい挿話に満ちあふれています。雙眼の巨人キュクロプスからの脱出。魔女キルケの島での冒険。冥界行。セイレンの歌

の誘惑。あるいは可憐な王女ナウシカアとのほのかなロマンス――数えあげるときりがありませんが、ここではカリュプソの挿話をとりあげます。

「海の臍なる、波洗う孤島」オギュギア島にオデュッセウスが漂着したとき、そこに住む女神カリュプソはかれを助けたうえ、自分の夫として島にとどまるなら不死の身にしてあげようと説き、しばらく一緒にその島で暮らします。女神がオデュッセウスに惚れ込んでしまったわけですが、かれの方は懐郷の情に耐えず、結局ゼウスのとりなしがあり、出立が許されます。しかしまだ女神は未練があり、こんな意味のことを言います――そなたは帰国を果たすまでに大いに苦しみますぞ。それを知っておれば、私とこの家にとどまり、不死の身になっていたものを。妻に再会したいと切望しておるが、姿形は私の方がずっとすぐれておるではないか。なにしろ、人間の女が容姿で女神にかなうはずもないのであるから。

それに対して「智謀豊かな」オデュッセウスは答えます。松平訳で引用します。

「尊い女神よ、どうかそのことでわたしにお腹立ちになりませぬよう。思慮深いペネロペイアといえども、相対して見れば、その容貌も体格もあなたに劣ることは、わたし自身十分に承知しております。こちらは人間の身、あなたは不老不死の神でいらっしゃるのだから。しかしそれでもわたしはこれまでずっと、家へ帰って帰郷の日を迎えたいと思いつづけ、それを願ってきたのです。たとえ葡萄酒色の海の上で、どなたかの神様によって難破させられようとも、艱難に負けぬ不動の心を持って耐えるつもり、すでにこれまでの波の上、干戈の間で幾多の苦難に遭い、苦しみ抜いてきたわたしです。さらにそのような難儀が重なってきたとて、なんのことがありましょう。」（第五歌二一五行以下）

カリュプソのもとに滞在して八年目のことです

から、オデュッセウスは妻と最後に会ってから少なくとも一七年はたっています。このときペネロペイアは若くても三〇代半ば、あるいはもう四〇の坂を越えているのかもしれません。寄る年波には勝てず、永遠の若さを誇る女神と容色を比べられるはずもなく、むしろますます両者の差は広がるばかりでしょう。しかも女神は「不老不死」という願ってもない条件をオデュッセウスに提示しています。並外れた知力と体力を備えた英雄とはいえ、死すべき存在であるのは普通の人間とおなじです。ところが、神々と同等の不滅の存在にしてやろうという申し出にもかかわらず、オデュッセウスはここで死すべき人間世界に戻ることを欲し、その意向をカリュプソに言明しているのです。

おなじギリシア神話でも、たとえばアルゴナウタイが求める金羊毛は、不老不死の希求の象徴と見ることができますし、シュメールのギルガメシュ叙事詩以来、不死への激しい渇望が現代に至るまで数多の物語の一定型をなしていると言えます。

ここでのオデュッセウスの決意表明は、そうした希求とは正反対で、むしろ生成し、不断の変化をとげ、やがて老いて滅んでゆく、神々の観点からすればきわめて「不完全」な人間の生に回帰してゆこうとする意志が、「翼ある言葉」によって語られているのです。こういうくだりを見るにつけ、ギリシア神話の代表的な物語の一つとされているオデュッセウスの冒険譚は、逆説的にも、神話的主題を媒介としながら、神話からの解放をはかった物語なのではないかという感じがしてくるのです。解放感はここにも由来します。

かくして、翌朝、つまり、朝のまだきに生れしばら色の曙の女神が姿を現わしますと、オデュッセウスはみずから筏を作りだし、五日後に美貌の仙女カリュプソに見送られ出帆します。彼

女の予言どおり、故郷に帰還するまでに葡萄色の海の上でまだ数多の苦難が待ってはいるのですが。

（十文字学園女子大学）

人間教育のエッセンス『シーラという子』

伊藤美奈子

敵意むき出しの目をしたちっぽけな子ども、シーラ。家庭内暴力、貧困、精神的にも肉体的にも虐待を受け、愛を知らずに生きてきた六歳の少女が、初めて自分を受け入れ愛してくれる教師に出会い、堅く閉ざされた心をおそるおそる開いていく。その五ケ月間の様子を、直接関わった教師自身が書き綴った話である（トリイ・L・ヘンデン著、入江真佐子訳、早川書房、一九九六年）。

ある日突然、著者トリイの教室にシーラがやってくる。傷害事件を起こしたため精神病院にはい

ることになっていたが空きがなく、臨時の措置であった。しかし、トリイの教室は、あらゆる障害児教室から見放された子どもたちをすでに八人も抱えていた。みんな手厚い保護を必要とするデリケートな子どもたちである。それなのにスタッフはわずか三人。季節労働者のアントン、彼は子ども相手の仕事をした経験はない。それに中学生のウイットニー。それぞれに心に翳りを持った仲間たちであった。しかし、こんなちぐはぐなチームが、この教室の子どもたちの心の波長にぴったりと寄り添う形で互いに成長を遂げていく。

本稿では、本文中のいくつかの場面を紹介しながら、心に傷を持つ子どもたちに関わる教師としてのトリイのすばらしさに注目してみたい。

椅子をコーナーから運んで部屋のまん中に置いた。彼女をクラスのみんなから孤立させたくなかったからだ。P30

なれなれしくしすぎて彼女を怖がらせたくなかったが、私が彼女のことを気にかけていることはわかってほしかった。P52

トリイの教室は、あくまで学校の中にある一つのクラスである。だからトリイは、シーラに対しても特別扱いはしない。純粋であるがゆえに手厳しい子どもたちの言葉から、シーラをかばうこともない。たとえその場ではかばえても、別の場で手痛い仕打ちを受けることはわかっていたからである。とことんクラスの一員として、クラスの子どもたちの中でシーラを受け入れようとしている。しかし、シーラにとって見知らぬ人に近づかれたり接触されるのは言いしれぬ恐怖を呼び起こす。それを敏感に察知し、適度な距離を保ちながら気持ちだけはシーラに向け、つねにサインを発信し続けるトリイ。人間への信頼感を根こそぎ奪われた子どもに近づくときの基本姿勢ともいえる心構えが滲み出ている。

……私が聞いていることを知らせるために、ふんふんと相槌はたくさん打っていたが。それから、お互いの顔を見ないで話ができ、またいま話しているんだということをあまり意識させないために、ぬり絵をしたり、紙粘土で何か作るなどの、集中しなくてもできる作業で忙しいように工夫をした。P100

トリイの教室に入ってくる子どもたちは、みんなそれぞれ事情を持っている。自閉症、強迫神経症、知的障害、そしてその事情ゆえに二次的な心の傷も受けている。そんな子どもたちがおもむろに自分を語り出すときがある。その際、面と向き合う姿勢は子どもにとって非常に重いものとなる。大人からのまなざしが子どもの言葉の流れを止めてしまうこともある。そんなとき、心と耳は傾けながらも、しばりとなる視線をぶつけないような工夫が必要になる。これは、障害を持つ子どもだけでなく、思春期の子どもたちに接する場合にもあてはまる。

生まれてから六年間、彼女はずっと疎んじられ、無視され、拒否されてきた。車から放り出され、人々の生活からも放り出されてきた。そしていまになってようやく彼女を抱き、話しかけ、しっかりと抱きしめてやる人間が現れたのだ。シーラは私が示す愛情をひとつ残らず吸収した。P106

トリイや教室の子どもたちとの交流で、敵意だけしか読みとれなかったシーラの瞳から、その影が消え、だんだんに子どもらしい表情が戻ってくる。真実の愛情と善意に出会い、不幸な過去という覆いが徐々に外されていくにつれ、本来のシーラらしい素直さと才能が開花する。このときのトリイの感激は、教師としての驚きとして書かれているが、それ以上に行間から滲み出るシーラへの人間愛に心打たれるものがある。

私が彼女から離れてしまわないということを知って、安心することが彼女には必要なのだと感じていたからだ。依存と依存過剰との間のどこで線を引くかは微妙な問題だった。

P 137

（親子ごっこをしようというシーラの提案に対し）私が今まで受けた心理学の授業のすべてが、だめだといえと迫っていた。だが彼女の目を見ているとどうしてもそうはいえなかった。P 243

トリイはシーラに、教師として出会った。シーラに限りない愛しさを感じながらも、トリイには教師としての顔がある。どこまでも甘えさせるべきなのか、甘えすぎになっていないか。トリイの心は、いつもこの迷いの間で振り子のように揺れ動いている。〝近づきすぎてはいけない。枠を壊してはいけない。でも今この子には、過剰なばかりの愛情が必要なのだ〟。これは、学校現場でもカウンセリングの場でもしばしば経験するジレンマである。この〝切迫した揺れ〟なしに真の心の接触はあり得ない。

心に傷を負った子どもたちが増えている。ある子どもは、他者を傷つけたりモノを壊したりというように、外在化・行動化することでその苦しみを紛らわそうとする。またあるものは、その苦しみを内向させ、自分の殻に深く閉じ込もってしまう。

犠牲者はシーラだけではないのだ。彼女の父親もまた彼女と同じだけの気遣いを必要としており、またそうされるだけの資格を持っているのだった。ああ、そういう人に気配りをしてあげるだけの十分な人間がいたら、無条件に愛してあげるだけの人がいたら—私は悲しい思いでそう思わずにはいられなかった。

P 290

わかりにくい形で心の危険信号を発する子ども

たちの心に寄り添える存在が、今後ますます必要とされる。このトリイの実践記録は、臨床家だけでなく、教師になる人にとって、とくに、心に問題を抱える子どもたちを相手にする教師にとって、きわめて有益なテキストとなるであろう。

フィクションであるがゆえの迫力を秘めながらも、決して感情に流されず淡々と書かれた本著から、深い感動とともに、人間教育のエッセンスを読みとっていただきたい。

（お茶の水女子大学）

こころのための処方箋

吉増　克實

精神科医として診療に携わっていると、患者さんから何かこころのために良い本はありませんかと聞かれることがあります。わたし自身いつの日かそのようなこころのための処方箋といった本が書けたらいいなと思いながら、折に触れておすすめできる本を探しています。よくご紹介する本の

中にまず三木成夫の本がありますが、『海・呼吸・古代形象』（うぶすな書院）や『胎児の世界』（中公新書）などの著作については前にこの欄でご紹介したことがあるので、今回は一番最近出た『**ヒトのからだ**』（うぶすな書院）だけをご紹介しておきます。この本は解剖学者としての三木成夫が、ヒトのからだを全体として論じた本です。三木はのちに解剖学総論としてあらためてからだ全体を論じた著作を書き進めていましたが、彼の早すぎる死のために未完に終わってしまいました。今となっては、ヒトのからだの全体を採り上げたものとしてはこの本が唯一のものとなっています。もともとは一般向けの科学百科事典の一部として書かれたものであるだけに、一般の人々にも理解しやすく書かれていることもおすすめしたい理由です。

この本の中で取り上げられているヒトのからだはむろん目的論的にしつらえられた単なる機械のようなものではありません。私たちのからだには地球上の生命発生以来の悠久の歴史が刻み込まれているのです。わたしたちの耳の穴がわたしたちがかつて魚であった時代のえら穴の名残であるなどと信じられるでしょうか。三木によれば、地球上の生命形態は、大地や大気と直接交流しながら自分を養うことのできる植物という生命形態と、それが不可能になり植物や他の動物を餌とするために動きまわらざるを得なくなった動物という生命形態とに区別されます。そして、ヒトのからだの構造についても、心臓をその象徴とする栄養循環生殖という植物性の生命過程と、脳をその象徴とする感覚伝達運動の動物性の生命過程とが対比され、それぞれの歴史がていねいに述べられていく中で生命の本質が明らかにされていくのです。

それはそうとしても地球の原初の海の中にわたしたちの祖先となる最初の生命球が誕生したのはただ一度のことであり、それが地球環境の激変の

中ですがたかたちを変えながら一度たりともとぎれることなく今日まで続いてきたということは大変なことではないでしょうか。祖先をたどっていけば、今生きている生命のどれもが三十数億年の長い家系をもっていることになるのです。そしてまたこの長い生命の歴史の中にわたしたちのひとりひとりと同じ形をした生命はひとつとしてなかったのです。ひとつひとつのどの生命も長い歴史を生き延びてきたかけがえのない存在であるという事実を思い起こすだけで、生きとし生けるいのちのすばらしさに驚嘆しないではいられないでしょう。

さて、わたし自身の専門の領域に近づけて考えてみると、心臓と脳とに象徴される植物性と動物性との区別は人間のこころのはたらきの中にもあらわれています。それは「こころ」と「あたま」のはたらきとして言葉の用法の上で峻別されています。鋭いあたま、暖かなこころという言い方は成り立ちますが、逆の言い方はありません。漢字の「思」という字もふたつの部分、脳をあらわす上の部分と心臓をあらわす下の部分からなっています。三木成夫はこの漢字を脳が心臓の音に耳を傾けている姿と呼びました。狭い意味での「こころ」のはたらきは自分を変化させつつ世界と連関し同化しようとしますが、「あたま」のはたらきは世界にはたらきかけてそれを切り離し固定しようとします。そもそも人格の中にはこのふたつの対立するはたらきが同時に備わっているのです。

このふたつのはたらきは互いに連関しながらもそれぞれに発達展開し、しかしまた未発達にとどまったり退行したりします。人格の成長とは一生涯続く課題であり、たいていの場合私たちはなお発達途上にあるのです。そして私たちが普通だと思っている行動自体がすでにある種の障害の現れであることさえ多いのです。

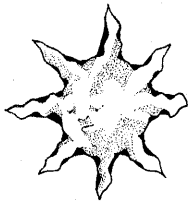
次に挙げる本は、大人の人格発達を考えるのにそれぞれ教えられるところが多いように思います。

『あるベルリンフィル楽員の警告』（テーリヒェン　音楽の友社）は音楽好きの方のためにいい本でしょう。ここではベックリンの「バイオリンを弾く隠者」の絵をテーマに、音楽との関わり方を通じて人格の段階的ありようが述べられ、現代文明の中での人格のあり方に警告を投げかけています。ちなみに原題は「繰り返されるバビロンと魂の言葉としての音楽」といいます。英語が苦にならない方には『Life and How to Survive It』（Robin Skynner and John Cleese Norton）をおすすめします。家族をはじめとする様々な集団についてもっとも健康なあり方から病的な段階に至る様々な段階が、精神科医ロビン・スキナーと俳優ジョン・クリースの対話を通じて軽妙に述べられています。これらの段階が表しているものもやはりこころとあたまのそれぞれの発達とその障害なのです。

エーリッヒ・フロムの『愛するということ』（紀伊国屋書店）と『悪について』（紀伊国屋書店）およびスコット・ベックの『愛と心理療法』（創元社）と『平気でうそをつく人たち』（草思社）はこころとあたまの対立を愛と悪との問題として論じ、心の成長を妨げるものと心を成長させるための訓練とについて述べられています。何が善で何が悪か。未発達のあるいは退行したあたまのはたらきである自己愛やむき出しの破壊衝動

は、規範からの逸脱であるという意味で悪であることは分かりやすいでしょう。しかしエゴイズムを抑制するための規範性それ自体があたまのはたらきによるものであり、充分な愛情や共感なしにそれが強制されると、こころにとって障害的に作用するということになって、生命の側から見ると悪であるとも言えるのです。この場合あくまで規範性からの逸脱を悪というなら、枠に収まらない個性も独創性も悪と呼ばれることになります。ここに悪の意味の混乱が生じるもとがあります。規範性はエゴイズムや破壊衝動から生命を守るために大切です。しかしそれは同時に最も大切な生命とこころにとっては対立するはたらきでもあることに変わりません。生命と愛とはそもそも個性的で独創的であらゆる規範を乗り越えて成長していくものなのです。むしろ大切なのは善と悪の区別ではなく生命と虚無との対立です。あたまのはたらきにはこころのはたらきの支えが必要です。こころを見失ったあたまの過剰による虚無の蔓延こそ現代の病理ですが、それを乗り越えるためにはやはりこころの、愛の成長と成熟を待つよりないようです。これらの本は緑蔭図書としてはやや重いかも知れません。その点では河合隼雄の『**子どもと悪**』（岩波書店）は読みやすくこの問題を考えるためのいいヒントをたくさん与えてくれるように思われます。

（東京女子医科大学）



「わかる」ということ——二冊の書物から

『子どもを殺す子どもたち』
『【賢治】の心理学　献身という病理』

友定　啓子

『子どもを殺す子どもたち』（デービット・ジェームズ・スミス著、北野一世訳、翔泳社、一九九七年）、この刺激的なタイトルの書物の原題は、“THE SLEEP OF REASON : The James Bulger Case”という。

この本はまさに、去年のあの神戸の事件が起こったときに出版された。まだ、それが中学生による犯行だとわかっていない時期だった。あの事件で初めて、私たちは子どもたちとの距離を自覚せざるを得なかった。しかしその後、あれほどの騒ぎにもかかわらず、私たちの「なぜ？」という疑問に、何一つ納得のいく答えが得られないままに、事件は目の前から忽然と消えてしまった。事件から何も学べないまま、飲み込めない異物のよ

うに胸の奥に残されたままになっている。ところが、それを合図に、まるで堰を切ったかのように、少年による凶悪犯罪が、続発してきた。連日のように報道される、大人の理解の域を越えた少年犯罪を、どう受けとめていいのかわからず、異物はますます大きくなるばかりである。

この書物は、一九九三年にイギリスで起こった、十歳の少年二人が、二歳の幼児をつれだし、乱暴して殺した上、線路の上に遺体を置き、さらに轢断したという、イギリス中いや世界中を震撼させた事件の記録である。日本でも、この二人の少年が被害者の幼児を連れていくビデオ映像が報道されたので、記憶に残っておられる方がいるだろう。

四百ページをゆうに越えるこの書物は、一ジャーナリストが知り得た事実のみで構成されている。普通、このような事件をルポルタージュとして取り上げるときは、犯行の動機、犯人の感情などを、さまざまな事実から推し量って、解釈が与えられる。私たちも読むときは、その解釈の「説得力」に応じて、それを受け入れる。その解釈が合理的で不変的で、単純なものほど受け入れやすいし、少々複雑でも、筋が通っていれば私たちは納得する。

しかし、この書物には、解釈も推量も表だった主張もない。解説すらない。それでも、この周到かつ膨大な事実の合流から見えてくるものがある。私は、解釈も結論も与えられなかったけれど、何かがわかったという気になった。自分がいかに、子どもというものを安易にとらえていたかということを、思い知ったような気がした。たかだか十歳の子どもの犯行である、いずれ本人の口から事実が明らかになるだろう、という甘い期待はみごとにうち砕かれた。少年のうちのひとりは、最後まで犯行を認めなかったのである。客観的な証拠がそろっているにもかかわらず、警察をはじめ、並みいる大人達は、彼を「落とせなかっ

た」。その少年には、大人に対する、一片の依存も信頼も認められなかった。十歳の子どもでも、自分を守るためなら、事実を絶対に言わないことができるし、どんなうそでも言える。なまじ論理的な思考をしないので、それだけ自由にふるまえるのかもしれない。この本を読んでも、少年達の犯行の理由も気持ちもわからない。しかし、ていねいな事実の積み重ねによって、少年達は何をどのようにしたか、事件を巡って人々が何をしたかがよくわかる。それだけで何かが見えてくる。

犯人が誰であるかを私たちは知りたいわけではない。何をどのようにしたのかがわかれば、私たちはそこから考えることや学ぶことがたくさんある。声高に厳罰や制裁を叫ぶだけの感情的方策に走らないですむ。そんなことをわからせてくれた本である。それにしても「事実」を語ることにこれほどのエネルギーがいるということ、何かをわかることのたいへんさをあらためて感じた、村上春樹の『アンダーグラウンド』にも似ている。

一昨年は宮沢賢治の生誕百年にあたり、たくさんの賢治本が書店に並んだ。私も、かの有名な「雨ニモ負ケズ」をはじめ、多くの童話や詩を通じて、賢治のことはある程度知った気持ちになっていた。私が以前から不思議だったことは、どうして妹をあんなに愛したのだろうかということ、美しいのにどことなく悲壮感が漂うのはなぜだろうかということだった。その謎が、この本のサブ

タイトル「献身という病理」を見た瞬間に、解けたような気がした（矢幡洋著、彩流社、一九九六年）。ここ二、三年、ブームの観を呈した「嗜癖」「共依存」ということばを思い出した。私自身、何をするのにも「役に立つ（願わくば、人様の）」ことをつい基準にしてしまうところがある。何かを人に頼むのでも、頼む分だけ自分が相手の役に立たないとと思ってしまうところがある。献身というほど、自己を投げ出してはいないので、私の場合はかなり俗っぽい。たぶん、病気じゃないと思う。

この著者はこの前に『「星の王子さま」の心理学』（大和書房、一九九五年）を書いている。そこでは「中心気質者」という概念を導き出している。それも悪くないが、さすがこちらは相手が日本人だけあって、フィット感が違う。多少の理論を利用して説明をしているのだが、それよりもたんねんな事実の積み重ね、賢治の文章の検証に基づいて、述べる著者の解釈の方が、よっぽど説得力がある。賢治は人からものを「受け取れない」人だったのだ。美しく見える「献身」「自己犠牲」という態度は、「自分は人に愛されない」という痛ましい自己規定の上におかれたものであった。こういわれると、偉大に見える人間の弱さや悲しさが見えてきて、いとおしくもあり、それとともに自分も励まされるような気がする。

私は読みながら、「心理学」とは、こういうものをいうのではないかと思った。心理学が「科学性」や「客観性」にこだわった「真理」を追求している限りは、間接性から逃れられない。徹底して、目の前の一人を理解しようとすることから出てくる真実の方が、結果的に人々をずっと力強く支えるのではないかと思った。『「星の王子さま」の心理学』もおすすめである。この著者の魅力のひとつは自分を除外しないことである。

（山口大学）

保育園をのぞいてみたくなる本……

『バオバブ広場にようこそ！』

吉川はる奈

保育園とのおつきあいは長い。修士論文に取り組んでいた十数年前ある園長先生にお願いをして保育園の子どもたちに協力をしてもらった。それが始まりである。そのとき私の中に子どもたちの楽しそうな笑顔と保育園の始まりはなんて朝早いんだろうという驚きが強く印象に残った。その後とある自治体の障害のある子どもを受け入れている保育園を巡回する相談員になって十年が経つ。月に何度かおじゃまして園長先生や子どもたちとのおつきあいが続いている。また一方で自分の住んでいる地域の保育園に我が子を通園させるようになって五年が経つ。慣れるのに人一倍時間のかかる我が子のおかげで（おそらく）担任の先生との毎日のやりとりは充実している。

このように様々な立場で保育園とおつきあいをしてきたし、これからもまだまだ続くだろう。私にとってはどんな立場であっても目の前の子どもたちを中心にさまざまな人間模様、ドラマが繰り広げられる保育の場に身をおくのは楽しい。

しかし最近『こころの教育』が叫ばれ子どもを目の前にして緊張する母親たちと出会う。母たちは『こころ』という言葉にとても敏感だ。いま目の前で子どもに向ける自分の行為が将来どんな形で子どもの『こころ』に影響するかと考えてしまい悩むのだという。

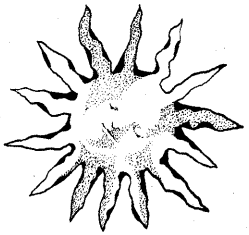
そんな時期にあって、カウンセラーの鈴木宏子先生から一冊の本をいただいた。それが『バオバブ広場にようこそ！』（遠山洋一著、筒井書房）である。

この本は、保育だより「バオバブ」や連絡帳、そして文集に取り上げた、子ども、家族、保育者達の生き生きしたエピソードを集めた、バオバブ保育園の保育を紹介したものである。

著者はバオバブ保育園の園長、遠山洋一氏である。『バオバブ保育園』と『遠山洋一園長』の名は全国私立保育園連盟の活動を紹介する文章で読み知っていた。だが具体的にバオバブの保育について書かれたものを読むのは初めてだった。

著者である遠山氏は「私は保育の専門家ではない」と言う。だが母親として「こんな保育園があったらいいな」と思うし、相談員として「こんな保育の存在を『こころ』に思い悩む母たちに知ってもらえたらいいな」と思う。

遠山氏は「保育園にはいろいろな人がいたほうがいい」という。バオバブ保



育園では「保育の専門職ではない職員も、そういう意味で貴重な存在だ」と子どもと関わる層も幅が広い。また「保育園をできるかぎりオープンなものにしたい」という。「保育園の園舎は生活の拠点と考え、毎日の遊びや生活は地域の様々な場所を利用させてもらう」一方で「保育園にも地域のいろいろな人が気軽に出入りできるようにしたい、保育園の保護者も地域の人々も含めて保育園を子どもを取り巻く『ひろば』にしていきたい」という。つまり「保育園の機能や役割を拡大して」「ファミリーサポート」という問題意識で表現する。

「親が孤独で、孤立すればするほど、子どもに対して指示や要求、期待が多くなる。いろいろな人とのコミュニケーションが豊かであればあるほど、人は子どもの要求をゆっくり聞いてあげられるようになる……これは親に限らず保育者でも医者でも同じこと」であると小児療育センター元所長の佐々木正美氏のことばを引用している。そして「自分は一人ではない、愚痴を聞いてくれる人がいる、支えになろうとしてくれる人がいる、と思える環境にいることは子どもにとって大きなこと」だとし、保育園のサポートの範囲を模索している。ただし「家庭を支えるといっても保育園がどんどんサービスを提供し、親はサービスをただ利用するだけ」という関係に陥る危険性を指摘した上で「子どもを介してかかわり合う中で、親と保育者、また親どうしが交流しあい、子どものために協同していく関係を」つくることの必要性を指摘している。

子どもに関わる者たちの『こころ』が安定していることの大切さは、子どもの『こころ』を心配する立場ゆえに忘れられがちである。

『こころの教育』のために子どもを目の前に緊張する母親の『こころ』は安定しているとは言い難い。

もう一つ大きな指標として「保育園は子どもの生活の場であるのだから」と前置きした上で「子どもが自分というものを確立させていくこと」を掲げている。「保育者の視点が行事や活動に偏りすぎて、日常生活の安定、充実ということがおろそかになっていなかったか、あれこれ経験させたという大人の思いが強すぎて子どもたちに無理をさせていなかったか」と見直しを欠かさない。行事、活動が「やらせ」に陥ることを避けたいという願いが反省、工夫、検討を経て運動会がプレイデーへと生まれ変わった。

これらを実施してきた保育者集団は一丸になって前進しているかというとそうではない。意見が対立し、議論も欠かさない。「意見がまとまらないときには決してあせらず、別の機会までテーマを棚上げにして考える時間を確保する」という。保育者ひとりひとりの考え方を生かすことと保育者集団としてのまとまりをつくることのバランスを保っていくためである。

ひとりひとりを大切にし、家庭を支え、地域に開かれた場としての保育園を目指す保育者たち。母親としてはこんな保育園に憧れるし、相談員としては悩みを抱える母たちにその存在を知らせたいと思う。

これだけのことを実現させていくことは並大抵ではないだろう。だが「〝素人〟に徹す〝玄人〟」と評されるように子どもをみる目の新鮮さと「子どもの側に立つ」鮮明な立場は、当たり前なこととして忘れられがちな保育の『こころ』を思い出させてくれる。

（お茶の水女子大学）

遊びこそ、子どもにとってのお仕事

楡木　満生

今の子ども達は遊ばなくなった。いや正確に言うならば、大勢の子ども達が戸外で群れをつくって遊ぶ機会を見かけなくなったと言うべきであろう。その代わり、それぞれの家にこもり、テレビを見たり、ゲームソフトで遊んだりして費やす時間が増えている。公園から子どもの姿が消え、たまに戸外で子ども達を見かけても、大人の統制下で組織化され、精緻な動作を獲得するために練習に励んで行動するだけである。

子どもは遊びを通して成長する。子どもは自発的な遊びの中で創造性を豊かにし、対人関係の接し方を磨いていく。ところが現在、子どもが子どもらしく自然発生的に集まり、自分達で何をして遊ぶか考えたり、ましてや遊びを創造する余裕など、とても望めない状況である。今後の子どもの協同意識の成長やチームワークを通した役割行動などの発達はどうなっていくのであろうか。

子どもの中から創造力あふれる遊びが消えつつある。この傾向は年を追うごとに深刻化している。それが将来

この国を受け継いで貰う若者達の意識に大きな影響を与えるのではないかと心配されるのである。

空想豊富な一人遊び

事例1　二歳の頃の幼児。新幹線の先頭車両の玩具で遊んでいるのですが、ほかの玩具とぶつけあってすぐに壊してしまいます。壊すのをやめるように言ってもすぐに忘れて玩具を壊してしまいます。玩具を他の玩具にぶつけて壊すというのはどのような意味があるのでしょうか。

この幼児の遊んでいるときの様子を観察すると次のようである。例えば、家庭の居間で新幹線の一両目のおもちゃを「シューシュー」と言いながら押している。やがて前方に椅子を見かけると、それを山に見立て今度は山に上り始める。そしてやがてタオルを川に見立ててそこを飛び越していく。最後に、大きな自動車模型が目にはいると自分の新幹線を強くぶつけて喜んでいる。

幼児にとっておもちゃでの一人遊びの世界は、何といっても夢の多い世界である。子どもが新幹線のおもちゃを手にして動いているとき、彼は新幹線の運転手になったかのような気持ちになって動かしている。やがてタオルのところでは新幹線は空を飛び超えて進んでいくが別にそれが矛盾を感じた様子もない。さらに自分が手にしている新幹線のおもちゃより大きな自動車模型に対しては明らかに攻撃的になっている。それはまるで日頃抑えつけられ、あれをやってはいけない、これをやってはいけないといっている大人に対して、幼児側からの抵抗を暗示しているかのようである。まさに幼児達は遊びのなかで自分を表現し、そのときの感情を発散していることが分かる。

幼児達にとってはすでに明快な形をしているものより形が不明瞭なものの方が、想像力をかき立てられる。幼児の世界では、道端の石ころ一つ、木々の切れ端がすでに魅力的なおもちゃである。しかし、現在の幼児を取り

囲む環境では、その道端の石、木々の切れ端を拾うことが難しくなり、テレビ番組を見たり、精巧な形をした電動玩具を買ってもらう方が手軽にできる。ここに問題がある。つまり、想像力を能動的にかき立てる前に、受動的に画面からある種の感情のストーリーを押し付けられたり、精巧な形をした玩具で遊び方が限られてしまったりする。つまり、幼児がその場の感情にしたがって自分から遊びを展開することが、困難な状況が出現しているのである。幼児の中の豊かな感情表出がしにくくなっているのである。

試行錯誤の人間関係

事例2　（二歳児の男児の母親からの相談）同じ年頃の子ども達と出会うとすぐに相手を突っついたり、叩いたりして相手を泣かせてしまいます。何度注意して仲良くさせようにもどうも言うことを聞いてくれません。いつの間にかこの地域で有名な腕白小僧と言うことになってしまいました。どうしたらよいでしょうか。

二歳児の他の幼児との最初の接触はさりげなく同じ種類のおもちゃを取り出して同じような遊び（平行遊び）をするところから始まる。互いに相手を意識していても、話し合うようなことはせずに少し離れたところで同じ動作の遊びを繰り返す。意識をしていても、どのように接近していったらよいのか分からないのである。

その次の段階になると、積極的な幼児は相手の幼児のところに行き他の子どもとちょっと身体をつついてみたり、相手のもっているおもちゃに触れてみたりする。すると相手の子どもは驚いて泣き出すのが常である。多くのこのような最初の接触は、互いの人間関係技法が稚拙なために失敗に終わり多くの親を驚かす。親の中には過剰反応をして「二度とあの子どもとは遊ばせない」と思ったりするが、実は泣かせたり泣かせられたりしながら子どもの心理的成長が促されると思った方がよい。こ

のような試行錯誤の経験を通して幼児は他者の意志の存在を知る。自分と同じように他者にも遊びたい欲求があることを知り、双方で遊びたい気持を調整していくことが出来るようになる。この事例でも特に問題となる腕白小僧でなく、少し時間が経過して発達が進むと子どもの他児への配慮がみられるようになった。

さらにこれがもう少し成長してくるようになると様子が代わってくる。少し言葉が自由になり、意志交換が可能になるので他者のおもちゃを貸し借り出来るようになる。そしてお互いに意見調整し協力して遊び始めると、遊びがダイナミックになる。例えば、一人でつくっていた穴掘りよりも二人で協力して掘るとずっと大きな穴が掘れ、遊びが大きくなる。このように協力して行う遊びを連合遊びと呼んでいる。

主導権を争う四歳児

事例3　（四歳児の母親）幼稚園仲間と最初は一緒に仲良く遊んでいるのですが、しばらくするとけんかになり、やがて泣かされて帰ってきてしまいます。よく見ていると、どうも次に何の遊びをするか、というところで意見が対立しているようです。私としてはどうも仲間はずれにされるのがつらくて見ていられないのですが……何とか仲間にいれてもらえるでしょうか。

この例の幼児の行動を見ていると自分が主導権をとって、好きな遊びをしている時にはうれしそうに遊んでいるが、他者からの提案された遊びには見向きもしないことがわかった。連合遊びをして仲良く遊んでいるうちに

当然役割分化が起き、リーダーとフォロアーの関係が出てくる。この時に主導権を誰が発揮するかで、仲間内に競争が始まる。リーダーといっても確定的なものではなく、ある遊びについてはA児がとったとすると、次にはB児が得意な遊びになり、B児がとるというように時と場合で代わっていくのが普通である。だから、一人の幼児がリーダーになるときもあれば、フォロアーの役割をとっていくこともある。当然他児がリーダーであるときには自分の意に沿わない遊びをやらなければならないこともある。鬼ごっこは楽しいが、鬼になるのは誰でもいやなものである。しかし、鬼がいなくては鬼ごっこの遊びが成立しない。鬼の役割をこなすということは今までの刹那的で衝動的な「好き、きらい」だけの感覚から、時間的な展望をもち、いやなことを引き受けてもその後に約束されたもっと大きな楽しさに気付き、当座をがまんするという新しい感覚を身につけることが必要になる。

大勢が参加する遊びにはルールが必要である。新たなルールをつくると、今まで知らなかった新たな遊びが可能になり、今までと違った楽しさが開発されてくるのである。グループ内で自分の好き嫌いで動くのではなく役割行動が芽生えたときからグループの一員になれるのである。さらに自分の提案した遊びが、皆が喜んで遊んでくれたら提案したリーダー児の喜びは倍加するのである。

遊び仲間とのコミュニケーション技法

幼児が友人をつくるということは、それなりにマスターしていかなければならないコミュニケーション技法がある。これを次に挙げてみる。

(1) 遊び仲間に加わる

例えば、他の幼児たちがグループをつくって遊んでいるところに入っていけず、おずおずとその周辺で一人遊びをしている風景を見かけることがある。こんなとき、

お母さんがその幼児に「『混ぜてー』と声をかけながら入っていってごらんよ」というと、幼児が仲間に加わりやすくなる。多くの幼児がこの一言が言えずに、他児の遊びをうらやましそうに見るだけで仲間に入れないで苦しんでいることも多い。

(2) 他児の遊んでいる玩具がほしくなる

幼児にとって他児が遊んでいる玩具は魅力的に見える。その玩具がほしくなり実力行使で奪い取ろうとして、相手を泣かせている光景もよく見かける。奪い取った子どもも相手が泣き出すとその場をどうしたらよいか分からず途方にくれてしまう。このようなときにはやはりお母さんの指導が必要となる。お母さんが子どもに一言「『それ、貸してー』といって相手が『うん、いいよ』といったら、借りられるのよ」と教えてあげると事態が改善される。そして「『貸してー』と言ったのに『いやー』と言われたら『じゃ、今度ねー』といってあきらめる方法もあるし、他の玩具を持ち出して『こっちのゲームも面白いよ』という方法もあるのよ」と別な方略を授けるのも一つのやり方である。

(3) 「バカ」と言われたらどうする

幼児仲間で遊んでいるうちにすぐにけんかになり「バカ」と言われ泣き出す子がいる。相手から何か言われてそれで泣いて引っ込んでしまうような性格では、この幼児のこれからの長い人生が思いやられる。やはりお母さんがそれなりの対処法を伝授しておく必要がある。「バカと言われたら、言われた方が馬鹿なのではなく、バカと言った方が馬鹿なのよ」と教えておくことである。こうすると子どもはバカと言われてもすぐに頭に来なくなるし、バカと言った相手がどのような欲求を阻止されてバカと言わざるを得なかったか考えさせることも出来る。

(4) ゴメンネと言える子どもに育てる

幼児の対人関係では、まだ社会性が未熟であるから泣いたり泣かされたりするのは普通である。ところが自分

の子どもの言動だけが正しく、他の家の子どもは間違っていると主張をされるお母さんがいる。このような環境下で育った幼児は次第に母親の主張に助けられて自分の言うことは何でも正しく、意見が衝突した相手は常に間違っているという考えをもち始める。物事の良否や善悪は相対的なものであり、時と場合によって流動的なものである。必要に応じて「ゴメンネ」と頭を下げることも人間社会の中で生きていくためには必要である。自分が悪いと感じたら素直にあやまれることも幼児期に育てておきたい対人関係技法である。

幼児期の仲間意識の育成の後に

幼児期に対人関係を活発にし、グループの中で自分の立場を確立できるようになることは、その後の子どもの成長に関して大きな資質の一つになる。と言うのは、幼児時代は、まだ母親がついていて仲間意識の形成を援助出来るが、小学校入学してからの児童では、このような技法は自分で苦労しながら見つけていかなければならないからである。

小学校に入学後、対人関係で苦しんで不登校やその他不適応で苦しんでいる子どもの中には、幼児期を受け身の生活態度で過ごし、対人関係のトレーニングを受けずに過ごしてきた子どもたちを見かける。このような子どもたちは、同年代の子ども達との話も出来ずコミュニケーション不足で苦しみ、他の子どもたちから離れて劣等感をもって暮らしがちである。人生の早期の幼児時代に学びたいのは何も特別に才能を要する技術ではない。誰もがごく平凡に行っている人と人の出会いを体験し、子どもながらの意見を交換したり教え合ったりしながら人間的に成長していく姿勢が大切である。

終わりに

幼児達が公園で遊ばなくなってから久しくなる。また、室内にいても子どもたちが主体的に自分の身体や五

感を使って遊ぶ内容が減っている。その代わりソフトゲームが栄え、受動的なテレビ鑑賞やビデオ鑑賞に一日を費やす。これでは身体の指先、目などの特定の部分を動かすのみである。子どもたちが身体をぶつけ合って共に触れ合い、喧嘩したり仲直りをしたりしながら、大切な友情の交換やチームワークの育成などの人間関係をつくることが必要である。

幼児期にこのように他児との触れ合いを十分に体験しないで成長した場合に、将来どのような問題が起こってくるか心配である。特に小学校高学年時にはギャング・エイジと呼ばれる年代がある。この年代は男の子は男同士、女の子は女同士で集まりそれぞれ自然発生的なグループをつくる年ごろである。そしてその中でいたずらや集団行動を通して、親からもらった家族の中の価値観を、社会的で普遍的な価値観に作り替えていく作業を行っているのである。ところがそのような同性仲間にいれてもらえず常に一人で同級生たちから離れて行動する子どもをみかける。これではこの発達段階が十分に乗り越えられないのではないかと心配である。

人は人の中で行動してこそ人に成長する。社会的に親や友人に囲まれて人間的な発達が促されていく。そのために子どもが自分たちでルールを創造し互いに触れあって遊ぶことが重要なのである。

まさに、子どもにとっては遊びこそ、大人の仕事に相当する必須経験なのである。

（お茶の水女子大学）

編集後記

夏休みに白馬の大雪渓に行きました。終点でバスを降り、いよいよ山登りが始まりました。

なにしろ、家族での登山はこのときが初めてで、中学一年と小学五年の子どもたちの足がどの程度のものだか分かりません。でも、多くの人たちの列に入って、おしゃべりしたり、休んだりしながら、子どもたち二人はどんどん先へ進みます。

つい、あんなペースで大丈夫かしら、と心配になります。大人二人はこんなにも疲れてきて遅れ気味なのですから。そこで、目の前に見える小屋で休憩することに決め、前方を行く二人は引き返して来ました。

お茶を飲みながら話を聞くと、二人は周りの人に「すぐそこが、雪渓だから」と励まされ、目的地までもう一頑張りしようと思っていた矢先に呼び戻されたのでした。休憩の後、大人は元気を回復して立ち上がりましたが、子どもたちは、休んだことで緊張が解けたのか疲れがでてしまい、先ほどの元気はかげをひそめてしまいました。

結果として、私がブレーキをかけてしまったようです。最後の登りの間も、子どもたちの元気は回復しませんでした。「山登りは疲れて大変」というのが、下山後の小学五年のNの感想でした。

未知なるものへの強い好奇心に支えられて自分のペースで進む子どもたちを、もっと信ずるべきだったと思いました。

（A）

幼児の教育

第九十七巻　第八号
（一九九八年八月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十年八月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620 東京都港区三田五―二―一
発売所　株式会社フレーベル館
〒113―8611 東京都文京区本駒込六―一―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

ひと目でわかる！

新しい表現あそび

総合的表現活動の指導法

八木紘一郎・枝常　弘・花原幹夫・海老原京子／共著

B5判　112頁　定価：本体1,900円＋税

新刊

初めての試み、フローチャート化

- ”表現の総合的展開”の立ち上げから、多様な展開のようすが一目でわかるようにチャート化しました。
- 指導しやすいように、子どもの発想を基にした「手さぐりコース」と保育者が活動の流れを設定する「セットコース」を設けました。
- 流れにそって発展できるように38例の製作資料をあげ、自分に合ったものを選択できるようにしました。

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第九十七巻　第八号　平成十年八月一日（毎月一回一日発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

子どもが見える、保育が見える

ひらめの会　編著
編集責任／平井信義・本吉圓子・立川多恵子

新刊

保育に花を咲かせましょう

心踊らせて保育の現場に飛び込んだものの、保育しにくい子どもに困ったなと感じたり、同僚・先輩と保育の意見がかみ合わず人知れず悩んだり、保護者との対応に戸惑うといった経験をされてはいませんか。
本書はそんな悩みをお持ちの保育者に、さまざまな角度から問題解決の糸口を示してくれる格好の保育入門書です。
明日の保育を実りあるものにしたいと努力されている方々にお勧めします。

A５判　288頁　定価／本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。